

心理援助職の初心者を対象とした Magazine Photo Collage(MPC) を用いた研修体験での「コラージュ療法体験・セルフチェックリスト」の活用の試み

今 田 雄 三

(キーワード：コラージュ療法, MPC, コラージュ療法の研修, コラージュ療法体験セルフチェックリスト)

1. はじめに

コラージュ療法は不要になった雑誌やパンフレットなどの既製の絵や写真、文字などはさみで切り抜き、台紙の上で構成し、糊づけるという簡単明瞭な方法でありながらも芸術療法の手法としてもっとも適応範囲が広く、奥深い方法の一つである。心理療法としてのコラージュの本質は、単にカタルシス効果に留まらず、作品の作り手であるクライアント（以下 Cl と表記）の心の思いを理解し、反応を返して行くという、一連の継続したプロセス全体に対して責任を負うべきセラピスト（以下 Th と表記）の存在に依拠している（森谷，2012）。しかし、初心者を対象としたコラージュ療法の研修法において、上記のコラージュの本質を体験的に理解するための手法は確立していない。筆者は心理援助職を目指す大学院生を対象に、Landgarten（1993）が考案したコラージュ療法の一つである Magazine Photo Collage(MPC)を用いたコラージュ療法体験授業を考案し（今田，2010）、受講者への自由記述のアンケートを元にコラージュ制作時の心理過程を M-GTA（木下，2003）を用い質的に分析した（今田，2020）。その結果、①自分が Cl 役となり Th 役に見守られコラージュを制作する体験（= Cl 体験）を通して、〈表現の促進〉〈感情体験〉〈内的作業〉などの〈Cl 役としての内的体験〉および、〈Th としての自覚〉、〈Th の存在意義の自覚〉などの心理的体験をすること（図 1-1）、②自分が Th 役となり Cl 役を見守り、関与しつつコラージュを制作してもらう体験（= Th 体験）を通して〈Cl 役との共有体験〉、〈Th 役としての機能〉と〈解釈についての学び〉などの〈Th 役としての内的体験〉、〈Th としての自覚〉〈技法・授業形態の特色の影響〉などの心理的体験をすること（図 1-2）が明らかとなり、③ MPC を用いた授業はコラージュの研修法に留まらず、心理援助者をめざす大学院生に Th の役割を自覚させる点でも有意義と示唆された（今田，2020）。筆者はこの M-GTA による分析を元に「コラージュ療法体験・セルフチェックリスト」を考案した（表 1-1, 1-2）。本研究では、臨床経験が5年以内の心理援助職を対象に MPC によるコラージュ療法の研修を行い、対象者がコラージュ療法の本質に関わる体験的理解を得るプロセスおよび「コラージュ療法体験・セルフチェックリスト」を用いることの効用について質的に検討する。

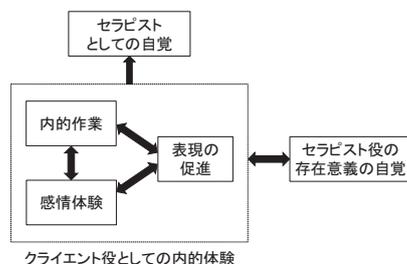


図 1-1 クライアント体験のプロセス

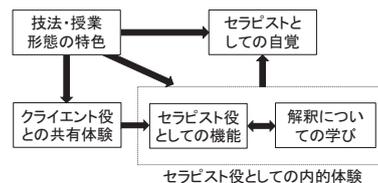


図 1-2 セラピスト体験のプロセス

2. 方法

(1) 実施時期

2020年12月から2021年3月までの期間で、各対象者ごとに個別で実施した。

(2) 対象者

筆者の居住地における若手の心理援助者のコミュニティに対し、臨床心理士または公認心理師の資格を取得後、臨床経験が5年以内の人を対象とするコラージュ療法の研修体験とその際の心理過程に関するインタビュー調査への参加者を募集している旨をSNSにより告知してもらい、同意が得られた5名を対象とした。なお全員が筆者と面識があり、これまでの臨床実践でコラージュ療法を実施した経験はなかった。

表1-1 コラージュ療法体験・セルフチェックリスト (CI 体験用)

		質問 (チェック項目)	体験の有無	
C I 的 体 験	表現の促進	①制作を通して、表現が促進されたり、意外な表現が出てきた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		②制作を通して、本来持っている自分らしさが表現されていた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		③制作時の状況が、作品の表現や自分の気持ちに何かしら反映されていた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		④表現が促進されることへの抵抗を感じた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		⑤指示によって、作品の表現や自分の気持ちに影響が出るのを感じた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		⑥作品の表現が促されるだけでなく、言語化も促進されるのを感じた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
	感情体験	⑦制作を通して、(楽しい、すっきりしたなど)ポジティブな感情が伴う体験をした。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		⑧制作を通して、(疲れた、怖くなったなど)ネガティブな感情が伴う体験をした。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		⑨制作を通して、ポジティブな感情とネガティブ感情とが葛藤する体験をした。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		⑩制作を通して、自分の心理状態や作品に表れるイメージが変化するのを体験した。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
	内的体験	⑪制作を通して、気づいていなかった何かを自覚したり、意識するよう体験をした。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		⑫制作に触発され、自分の内面に注目したり、自分のことについて内省した。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		⑬制作を通して、自分とは違う表現や感じ方をする人がいるのだろうと想像できた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
Th としての役割	⑭ Th (役)に見守られ、受け止められていると感じることの意義を感じた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無	
	⑮ Th (役)との間のラポールの差によって、制作体験の質に差が生じると感じた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無	
	⑯ Th (役)の声かけや解釈など、より意図的、能動的な働きかけの影響を感じた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無	
	⑰ Th (役)との間で、あたかも共同作業のように制作に取り組んだと感じた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無	
Th としての自覚	⑱ 実際の面接場面での CI の心境を理解し、配慮の必要性に気付くことができた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無	
	⑲ 実際の面接場面では、Th が CI に対しどんな姿勢を取るべきなのかを気付かされた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無	

表1-2 コラージュ療法体験・セルフチェックリスト (Th 体験用)

		質問 (チェック項目)	体験の有無	
共有体験	C I 役としての	①制作を通して、CI (役)との間で非言語的イメージが共有された。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		②制作を通して、CI (役)との間で言語レベルでの共有体験も大切だと感じた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		③実際の面接とは異なり、CI (役)と面識のあることの影響を理解できている。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		④実際の面接とは異なり、CI (役)が健康度の高い人であることの影響を理解できている。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		⑤病態水準の高い CI と関わり、表現を受け止めていく際の難しさを想定できた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
Th 役としての内的体験	Th 役としての	⑥ Th (役)として、面接の場の雰囲気や環境について配慮する必要に気づいた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		⑦ Th (役)の態度や言動が、CI (役)の表現や心理状態に影響を与えたと気づいた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		⑧ Th (役)と CI (役)との共同作業として作品が生み出されたように感じた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		⑨ Th (役)の CI (役)や作品へのコミットメントが、解釈に影響を与えたと気づいた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		⑩制作時の様子や連想など、作品以外の情報が解釈には必要であることを理解できた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		⑪解釈する際の不安や難しさについても率直に認めることができた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		⑫作品やそこに表現された心理などを自分なりに適切に解釈できたの実感があった。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		⑬解釈をどこまで提示し、扱うかについて、慎重な配慮が必要だと理解できた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		⑭今後自分が Th として、実際に CI と面接する上で参考となる経験ができた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		⑮実際の面接で Th が CI にどんな姿勢や心がけを取るべきか、気づくことができた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
Th としての自覚	Th としての	⑯実際の面接で Th が CI の状況や心境をどう理解し、判断するのかを想定できていた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		⑰ Th という役割を果たす際の不安や難しさを率直に認めることができた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無
		⑱ Th という役割を回避したり、置ききれない面があることに気づくことができた。	<input type="checkbox"/> 体験有	<input type="checkbox"/> 体験無

(3) 準備物

Landgarten (1993) に準拠し、①コラージュ・ボックス (「人物」と「さまざまな物」の箱に分ける)、②紙 (筒状のインクジェットプロッタ用紙を16×20インチ=40.6×50.8cmのサイズに切りわけた)、③筆記用具 (マーカー、ボールペン、鉛筆)、④糊 (液体状とスティック状の2タイプ)、⑤はさみ (先端が丸いもの) を準備した (図2)。

(4) MPC の教示

Landgarten (1993) に準拠し、MPC の4つの課題を順に教示して作品を制作し、連想を共有した (表2)。



図2 MPCの準備物

表2 MPCの教示 (4つの課題)

第1課題
「さまざまな物」の箱の中から気になった写真を選んで台紙に貼り、連想を台紙に書き込むか、話して下さい。枚数に制限はありません。
第2課題
「人物」の箱の中から4~6枚の写真を選んで台紙に貼り、その人物が「考えていること」と「言っていること」を連想し、台紙に書き込むか、話して下さい。
第3課題
「人物」と「様々な物」のどちらの箱からでもよいので、「良い」と「悪い」ものを表す写真を4~6枚選んで貼り、写真が表していることを書き込むか、話して下さい。
第4課題
「人物」の箱から1枚だけ写真を選んで貼り、「その人物に何が起きているか」を連想して下さい。次に「その状況が変わるかどうか」を考えて下さい。変わる場合は「変化を説明する」写真を見つけて貼るか、あるいは「何がそれを変えるのか」を書き込むか、話して下さい。

(5) 実施手順

1) 導入

本研究の目的、方法、所要時間について説明し、研究への参加はあくまでも任意であることを確認した。

2) MPC による CI 体験

1対1の模擬面接場面において筆者が Th 役、対象者が CI 役となり、MPC の作品を制作し、連想を共有した。

3) MPC による Th 体験

1対1の模擬面接場面において対象者が Th 役、筆者が CI 役となり、MPC の作品を制作し、連想を共有した。

4) コラージュ療法体験・セルフチェックリストへの記入とインタビュー

対象者に「コラージュ療法体験・セルフチェックリスト」を記入してもらい、その記入内容を参照しつつ、被験者が CI 役および Th 役として経験した心理プロセスについてインタビューを行った。

なお本研究は鳴門教育大学人を対象とする医学系研究に関する倫理審査委員会の承認を得た上で実施した。

3. 結果と考察

(1) 対象者 A

まず1例目の対象者 A での CI 体験および Th 体験について、作品と作品への連想、さらに体験後のインタビューでの A の語りを質的データとして、A の CI 体験および Th 体験における心的プロセスについて質的に検討した。

1) 対象者 A の CI 体験

筆者が Th 役、A が CI 役として制作された作品（図 3-1）とそれぞれの写真への連想を以下に示した。



図 3-1 対象者 A の CI 体験

i. 第1課題

【制作時の様子】教示を聞き、箱の中の写真を1枚1枚丁寧に見る。気になった写真が他の写真の束に紛れてしまい、もう一度探し出す。1枚だけ選ぶと思っていた様子で、枚数の指定はない旨を説明すると、選び終えていた写真1枚を貼ってから、気になっていた写真をもう1枚選んで貼り完成。写真のトリミングはなし。所要時間8分。

【選んだ写真と連想】①古い日本家屋：昔、隣に立っていた古い家によく似ているのでびっくりした。「過去と現在の接点」というイメージ。②和室の中：部屋の中が少し暗いのが気になり選ぶのに躊躇したが、屏風の表装を仕立てたりすれば何かが変わるかもしれない、自分のテーマが見つかるかな、と感じました。

ii. 第2課題

【制作時の様子】 教示を聞き、箱の中の写真を1枚1枚丁寧に見て、だんだん没頭した様子になる。気になった写真をより分け、台紙に試し置きし、最終的に上限の6枚を貼る。なお下記の①の写真は、箱に収めるため二つ折りになっているのを「背景として面白いので」とそのままの状態に貼る。トリミングはなし。所要時間30分。

【選んだ写真と連想】①母親と赤ちゃん：母親が「ありがとう、元気で大きくなって欲しい」と声をかけている。心の中ではさまざまな思いがある。②母親と娘：母親が「しっかり抱きしめて、思いを伝えたい」と思っている。声に出して言うてはいない。③犬と飼い主：飼い主が「長い間ありがとう。なかなか散歩に連れて行ってあげずゴメンね」と言っている（思っていることも同じ）。④コーヒーを飲む人たち：「これからは余裕を持ってゆったり過ごして行きたいね」と言い合っている（思っていることも同じ）。⑤お医者さん：写真には写っていない患者さんが「私の体、大丈夫でしょうか?」と言っている（思っていることも同じ）。⑥赤ちゃん：赤ちゃん自身は「早く生まれてきたいな」と思っているかな。

※①～⑥のどの写真についても、自分自身や自分と家族との関係について連想が及んだ。

iii. 第3課題

【制作時の様子】 制限枚数を確認し、物の写真を1枚ずつ見てより分ける。「良い・悪いで選ぶと、最前とは写真の見方が変わってきます」と言う。物の写真だけで6枚選び、人物の写真は見なかった。トリミングはなし。下記④の写真を上逆にして貼ったのに気づいたがうまく剥がせず、「これでいいですね」と確認。所要時間15分。

【選んだ写真と連想】①石：良いもの、自分を守ってくれる。そのことに繋がる過去の体験が、この写真を見てスーッと思い出された。②学校：良いもの。子どもにとって必要。特に難しい子、大変な子であれば「むしろ学校に来て欲しい、学校の中で支えていければ」と思う。③リモコン：良い面と悪い面がある。TVは情報を教えてくれるのは良いが、見る時間があまりに費やされるのは悪い（自分の弱さ）。④パソコン：良い面と悪い面がある。なくてはならないものだがまだ使いこなせない（自分の側の問題）。⑤車：よい面と悪い面がある。自由に動けるのは良い。でもちよくちよくぶついたり、運転に性格が出る。気をつけないと悪いものになる。⑥富士山と鳥居：良いもの。きれい、印象的。夜が明けていく雰囲気。自分の気持ちにプラスになる。身近に感じ、かつ神聖。

iv. 第4課題

【制作時の様子】 「1枚だけというのが難しい…」と言いながら、箱の中の写真を一通り見て気になった写真をより分け、候補をもう一度見直して、「これにします」と言い貼り付ける。所要時間15分。

【選んだ写真】握りこぶし

【人物の状況】 燃えている。それは怒りなのか？自分の中の強い思いなのか？それを言葉にして伝えて欲しい。こぶしに込められている思いは何か？とても気になった。

【どう変化するのか】 自分の中にあるもの（欲求）を出した！

【連想】 私自身にはあまりないので、パワーをもらえたかな？という感じ。最初はマイナス、ネガティブな印象だった。2回目に見た時に印象が変わった。家族のことも重ねて考えた。

2) 対象者 A の Th 体験

A が Th 役、筆者が Cl 役として制作された作品（図3-2）とそれぞれの写真への連想を以下に示した。

i. 第1課題

【制作時の様子】 教示を聞き、箱の中の写真を手早く見て気になる写真をより分け、台紙の上に並べ使う写真を絞っていく。およその配置を決め、台紙に収まるようトリミングしつつ貼る。終始集中していた。所要時間15分。

【選んだ写真と連想】①月夜の風景：凄く独特な雰囲気があって気になった。荒涼とした風景。②陰しい山：①の写真とも通じる峻烈で人を寄せ付けない厳しい雰囲気が気になった。③コンパス（方位盤）：色調が①の写真と似ていて並べて貼ると繋がりがよいと思った。「これからどう進むのかを指し示してくれるもの」というイメージ。④洞窟に光が差し込む光景：暗い洞穴の天井の隙間から光が差し込んで印象的。「希望の光が差し」というイメージ。⑤赤く焼けた炭：台紙の下の方の写真が暗い感じになったので、「暗がりの中で真っ赤に焼け光と熱を発している」イメージを与えるこの写真を貼りたくなった。⑥仏像：柔和な表情で見守ってくれている存在にいて欲しかった。⑦青空と雲：希望とか突き抜けた広がりといったイメージ。⑧大気圏外から見た地球：空から

さらに突き抜けて宇宙まで上昇するというイメージ。⑨空を飛ぶ鳥：高く自由に飛んでいくというイメージを託した。

※割と満足できた。割と自分らしさが出ていると思う。

【Th 役の着眼点】④の写真から一番強い印象を受けた。それに次いで、⑤と⑨の写真も印象深かった。

ii. 第2課題

【制作時の様子】真剣な中にも楽しんでいる様子で、写真を1枚1枚丁寧に見て候補の写真をより分ける。台紙に試しに置いたりしながら最終的に上限一杯である6枚の写真を選んで貼る。トリミングはなし。所要時間10分。

【選んだ写真と連想】①決勝戦で敗れた柔道選手：「頭が真っ白。何も考えられないし、何も言えない」オリンピックか世界選手権の決勝で負けた瞬間。「敗北」という非情な現実が突きつけられ、どう気持ちを切り替えるのか。②父親と子ども：父「お花取ったの？」とか優しく話しかける。子ども「うん」と答える。二人とも『楽しいな』と思っている。休日に楽しく二人で過ごす。③ネコを抱いた女性：女の人「ええなあ」（思っていることも同じ）④紛争地域に派遣された兵士と現地の子ども：武器を携行しての任務でも、地元の子どものとの交流はある。二人はお互いに関心を持ち、これから仲良くなれそうな雰囲気がある。兵士の任務が終わり帰国しても、お互いよい思い出として心に残る。⑤バザーでの生徒と地域の住民との交流：生徒「〇〇円です」住民「はい。えらいね」といった会話。生徒はちょっと気恥ずかしいが普段は出来ない体験が楽しい。住民も生徒たちとの交流が楽しい。⑥ボルダリングをする子どもとインストラクター：子ども「わあ、楽しい。もっと上まで登ってみる」と気分が高揚している。インストラクター「気をつけてよ」子どもの安全に気を配りつつチャレンジさせている。

※②③⑤の写真については、自分自身や自分と家族との関係について連想が及んだ。④⑥については自分の価値観の影響が出ているようだと言及が及んだ。

【Th 役の着眼点】①の写真を見て、選手が石のように固まっていると感じた。＜何故この写真を選んだのだろう？＞と思ったので、真っ先に質問した。「写真の人物は自分から遠く、心境が想像しにくい」ことがCI 役から語られた。カラーの写真と白黒の写真の枚数が半々だったので、そういう風に意図的に選んで貼ったのかが気になって、そのことも質問した。CI 役からは「特に意図的にそうした訳ではない」ことが語られた。



第1課題



第2課題



第3課題



第4課題

※A が Th 役となり、筆者が CI 役として制作。

図3-2 対象者AのTh体験

iii. 第3課題

【制作時の様子】先の課題でどんな写真があったか覚えており、テーマに合いそうな写真の見当はついている。多めに候補の写真をより分け、台紙に貼れる限度やバランスも意識し最終的に5枚を選ぶ。一番大きな写真が縦長なので台紙を縦に使用する。下記の①の写真だけ、余裕を持たせ輪郭に沿ってトリミングする。所要時間10分。

【選んだ写真と連想】①ネコ：良い。ネコ派なので、この写真が目に入り是非貼りたいと思った。とつてもネコらしい表情をしている。②気さくな食堂の店主：良い。下町の庶民的な食堂の店主。腕前は確かだが、気さくにお客さんに声をかける。店主自身が無理をしておらず、自然なふるまいをしている感じがいい。③不動明王像：良いと悪いの両方。不動明王は人間の煩悩を憤怒で焼き尽くしてでも悟らせようとする存在。そもそも人間の悪に部分があるからこそ顕現する存在なのでまさに「良いと悪い」の両方を表している。④「足元注意」の看板：良いと悪いの両方。この看板があるから注意することができるけれど、油断をしたら危険な目に合うかもしれないので。⑤コーヒー：良いと悪いの両方。コーヒーは好きだがカフェインの取り過ぎは体に悪いので。

【Th 役 の 着 眼 点】①が一番印象的だった。質問して、CI 役がネコ好きだと語ってもらえた。③の写真も、すごく大きいサイズだということと、(不動明王の背中で)炎がメラメラと燃えているのが気になった。CI 役の怒りを表しているのかもしれないと感じた。CI 役から「不動明王の憤怒にある種の親和性を感じる」ことが語られた。

iv. 第4課題

【制作時の様子】課題に合いそうな写真の候補は思い浮かんでいたが、絞り込むのにやや時間がかかる。子どもたちが写った2枚の写真のどちらにするか迷った末、最終的に1枚を選び台紙のほぼ中央に貼る。所要時間15分。

【選んだ写真】昭和の子どもたち

【人物の状況】夏休みで友だちと外で虫取りなどをした後、公園の水飲み場でのどを潤している。とても楽しい。

【どう変化するのか】最近では子どもの遊びも全然違う。でも昔に戻せと言いたい訳ではない。自分も昔こうして遊んだことをふと思い出す。子ども時代の体験が、今の自分に何か影響を残していると確かに感じる。

【連想】外国の子どもが横一列になって向こうへ歩いて行く写真とどちらにしようか迷ったが、こっちの方が自分の実体験に近いので選んだ。結局それでよかったと納得できた。

【Th 役 の 着 眼 点】CI 役らしい写真が選ばれたと感じた。過去を回想する語りがあり、Th 役と思いを共有できた。

3) コラージュ療法体験・セルフチェックリストの記入

i. CI 体験用

質問④「表現が促進されることへの抵抗を感じた」、⑬「制作を通して、自分とは違う表現や感じ方をする人がいるのだろうと想像できた」の2項目のみが『体験無』にチェックされ、他は全て『体験有』にチェックされた。

ii. Th 体験用

質問⑯「Th という役割を回避したり、徹し切れない面があることに気づくことができた」の1項目のみ『体験無』にチェックされ、他は全て『体験有』にチェックされた。

4) 対象者 A の心理プロセスの分析

i. 対象者 A の CI 体験における心理プロセス

※以下、文中の「 」(制作時)は制作時の様子から、「 」(連想)は制作時の連想から、「 」(インタビュー)はインタビュー時の発言から、「 」(着眼点)はTh 役の着眼点からの引用(テキストデータ)であることを表す。

【第1課題】「コラージュの制作には興味があった」(インタビュー)が、「対面で、Th 役に見られることは想定していなかった」(インタビュー)という戸惑いから、「第1課題の段階では、あまり自分を出さずに周辺的なところでやろうかな、と思っていたが」(インタビュー)、「昔のことを思い出すような写真が偶然出てきて」(インタビュー)、「びっくりした」(連想)、という感情体験を得て、『それから始まった』という感じだった(インタビュー)と述懐されている。

【第2課題】全ての写真から、自分自身や家族との関係に連想が及んだ。しかし「抵抗は感じなかった」(インタビュー)と言い、「段々気持ちが入ってくると、集中して作品づくりに専念していた」(インタビュー)。課題に沿って写真の人物の言葉や思いを連想しTh 役に語ることで「言語化することの意義を感じた。言葉にして共有することで、それが自分に戻ってきて再認識する感じ」(インタビュー)と語り、「制作するにあたって安心感

はあった」(インタビュー)。

【第3課題】「自分の高校時代の思い出が出てきた。それ以前のことも写真を見たのをきっかけにスーッと出てきた」(インタビュー)と語り、写真が回想を促した。また「自分の弱さ」(連想)、「自分の側に良くない点がある」(連想)「気をつけておかないと悪いものになるかもしれない」(連想)など、「自分の内面が強く出ていた」(インタビュー)。

【第4課題】「1枚だけというのが難しい…」(制作時)と言いながら、「最初はマイナス、ネガティブな印象だった。2回目に見た時に印象が変わった」(連想)ことで、「これにします」(制作時)と決め、「私自身にはあまりないので、パワーをもらえたかな？」(連想)と感じ、「強いインパクトを感じた。普段は言わずに自分の中にしまっておくので」(インタビュー)と語られたように、普段あまりない体験をしたようである。

ii. 対象者 A の Th 体験における心理プロセス

【第1課題】CI 役の作品について「④が一番強い印象を受けた。⑤と⑨の写真も印象深かった」(着眼点)と述べ、まず選ばれた写真に対し、印象の強いものに注目することでコミットする姿勢で関与を試みている。

【第2課題】「①を見て選手が石のように固まっていると感じた。『何故この写真を選んだのだろう?』と思い真先に質問した」(着眼点)が、CI 役にとり写真の人物は自分から遠く、心境が想像しにくかった。①の写真の人物は Landgarten (1993) が示す CI 役の自己像、家族像あるいは一般的な人物像のどれにも該当しない特異な人物像で解釈が難しかっただろう。次に「カラーの写真と白黒の写真の枚数が半々だったので、意図的に選んで貼ったのか気になり、そのことも質問した」(Th 役の着眼点)。CI 役は特に意図的に選択した訳ではないが、初心者が形式分析に基づいてコラージュ解釈を行おうとしたのは順当な手順だと思われる。

【第3課題】「①が一番印象的。CI 役に質問しネコ好と語ってもらえた」(着眼点)というように、CI 役の表現と Th 役の印象が噛み合ってきた。また③の写真についても「すごく大きい」(Th 役の着眼点)という形式分析や、「炎がメラメラと燃えている」(着眼点)のは「CI 役の怒りを表しているのかもしれない」(着眼点)という内容分析も、CI 役から「不動明王の憤怒にはある種の親和性を感じる」と語られ(着眼点)、的を射ていた。

【第4課題】「CI 役らしい写真が選ばれたと感じた」(着眼点)と語り、写真の印象を通して CI 役の印象へ自然とつながった。また「過去を回想する語りがあり、Th 役としても思いを共有できたと感じられた」(着眼点)という言葉からは、解釈に拘泥せず Th 役と CI 役の間でイメージや思いを共有することの大切さを実感したようだ。

(2) 対象者 B, C, D, E

1) 2例目以降の対象者への実施における修正点

対象者 A への実施を経て、コラージュ療法体験・セルフチェックリストを以下のように改良した。①コラージュ療法体験・セルフチェックリストの質問項目の文章を端的に意図が読み取れるよう短くした、②コラージュ療法体験・セルフチェックリストの回答が「体験有」「体験無」の2件法では体験の微妙なニュアンスが反映されにくいため、「非常に当てはまる」「やや当てはまる」「あまり当てはまらず」「全く当てはまらず」の4件法に変更した(表3-1~3-8)。またインタビューの最後に、「コラージュ療法体験・セルフチェックリストの使用がコラージュ療法の本質の理解に特に役だった点は何か」と、今回の研修についての自由な感想を尋ねることにした。

2) 各対象者ごとの MPC 体験における心理プロセスの分析

i. 対象者 B の CI 体験における心理プロセス

【第1課題】①モーニングコーヒー、②スピーカー、③橋、④気球の計4枚の写真が貼られた。「最初緊張していたが、抵抗もさほど感じなかった」(インタビュー)という状態でスタートした。

【第2課題】①花を差し出す手、②救出された人、③お茶を飲む女性、④スノーボーダー、⑤受験生たち、⑥キャンプファイヤーを囲む人たちの計6枚の写真が貼られた。「課題が変わりやや難しかったが、切り替えて選べた。でも自由な方がよい」(感想)と語った。⑤では「真ん中の女の子が一人だけ違う方向を向いている。落とし物をしたのに気づき焦っている」(連想)と語り、集団の中で困っている生徒を気に掛けているのが印象的だった。

【第3課題】①初日の出、②ワクチン、③学校、④時計、⑤軍艦の計5枚の写真が貼られた(図4-1)。①では「コロナで皆落ち込んでいて、年が明けたら何かが変わると期待」(連想)が語られた。②、④でも新型コロナに関する連想を語り現実への関心が窺われた。⑤について昨日TV番組で紹介されていたという話で盛り上がった。

【第4課題】「有事に備えて訓練している」状況の写真が選ばれ、「いざという時、この訓練が役に立ってくれる。事態は好転する」と連想された。他の候補の写真との共通点は「将来に備えて、今は黙々と頑張る」という点だ

と気づき、「一番端的にわかりやすい写真として防災訓練の写真を選んだ」（インタビュー）ということだった。

【CI体験を通して感じたこと】一番印象的だったのは、「第3課題でTh役から『学校』と『軍艦』の写真が隣接しているが、両者に共通したイメージがあるのかもしれない」と指摘され、自分は全く考えていなかったが、言われてみると「そうかもしれない」という驚きと気づきがあったこと（インタビュー）で、「ネガティブな感情も出て、葛藤も生じたが自分の中で処理できないことはなかった」（インタビュー）と語られた。



図4-1 対象者BのCI体験・第3課題



図4-2 対象者CのCI体験・第4課題

ii. 対象者BのTh体験における心理プロセス

【第1課題】①川、②都心のビル群、③険しい山、④花、⑤経口補水液、⑥神社、⑦花火、⑧ロケット、⑨月の計9枚の写真が貼られた。Th役の着眼点は「写真の選び方、連想の言いづらさ、どこまで自己開示してくれるか、写真の枚数」だった。写真の内容より、写真を通したCI役のやり取りと奥にある心理を感じ取ろうとしていた。

【第2課題】①温泉客、②釣りをする人たち、③読書する男性、④宇宙飛行士、⑤赤ちゃんとお母さん、⑥セミナーの講師と受講者たちの計6枚の写真が貼られた。Th役の着眼点は第1課題からの流れで、「どんな連想をするか、写真を貼る位置」だった。CI役は写真を貼る位置を「じっくりくる感じに決めた」としか説明できなかった。

【第3課題】①家系図、②地震で机の下に隠れる家族、③仏像、④温泉、⑤卒業式、⑥コーヒーの計6枚の写真が貼られた。Th役の着眼点は「①の写真をずっと見ていたこと」だった。CI役は①を「悪いもの。家系や家柄にとらわれるのは良くない」と連想し、ネガティブな印象で「ずっと見ていた」ことが共有された。なおTh役は第3課題の教示を一部伝え損ね、「解釈への不安・難しさを率直に認められていなかった」（インタビュー）と解釈した。

【第4課題】サンタクロースの写真が選ばれ、「今年は出来なかったが、新型コロナ終息後は再び子どもたちに直接プレゼントを配れるようになる」と連想された。Th役の着眼点は「『未来・これから』というイメージかな？」だった。CI役は、CがCI体験で新型コロナに関する連想が語ったのが、写真の選択や連想に影響したと感じた。

【Th体験全体を通して特に感じたこと】「普段職場で、自分はCIの斜め前あたりから『でも、こういう見方もあるかも知れないよね?』ということを示す立ち位置でいる感じに思っていた。今回Th役をしてみて、ThはCIの斜め後ろあたりにいて見守っている、という立ち位置なのかな、というイメージが浮かんだ」（インタビュー）。

iii. 対象者BのCI体験・Th体験の特徴

BのCI体験の眼目は、「Thとの交流により緊張が次第にほぐれ、自分らしい表現が表れた。Th役からの指摘で自分では意識しなかった解釈の可能性に驚きと気づきがあった」だと思われる。チェックリスト（表3-1）では、全ての項目が「非常に当てはまる」「やや当てはまる」にチェックされ、①「意外な表現が出てきた」、⑩「自己への気づきがあった」⑫「能動的な働きかけを感じた」は「非常に当てはまる」にチェックされ、上記の特徴を反映している。またTh体験では、コラージュ療法の知識や理論が十分でなく、CI役が選んだ写真のイメージを解釈するより、CI役の連想や反応、Th役とのやり取りを手がかりに気持ちを察しようとしていた。またチェックリスト（表3-2）で、⑤「病態水準の重いCIには難しいと思った」⑪「解釈することの不安を感じた」の2項目のみ「あまり当てはまらず」にチェックされたのも、知識や理論の不足が影響したのかもしれない。

表 3-1 対象者 B のコラージュ療法体験・セルフチェックリスト (CI 体験)

	チェック項目	回答 (当てはまる箇所に○)			
		非常に当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらず	ほとんど当てはまらず
CI 役との内的体験	①意外な表現が出てきた	○			
	②自分らしさが出ていた		○		
	③状況が反映されていた		○		
	④表現への抵抗を感じた		○		
	⑤教示が表現に影響した	○			
	⑥言語化が促進された	○			
	⑦ポジティブな感情が起こった		○		
	⑧ネガティブな感情が起こった		○		
	⑨ポジネガの感情間で葛藤した	○			
	⑩感情の変化が生じた	○			
	⑪自己への気づきがあった	○			
	⑫自己への内省が生じた	○			
	⑬自他の違いに気づいた	○			
Th 役の内面的存在意義	⑭見守られている感覚があった	○			
	⑮ラポールが得られていた	○			
	⑯能動的な働きかけを感じた	○			
	⑰共同作業をしている感覚がした	○			
面接場面の活用	⑱コラージュの扱い方の理解を理解した	○			
	⑲セラピストの姿勢が理解できた	○			

表 3-2 対象者 B のコラージュ療法体験・セルフチェックリスト (Th 体験)

	チェック項目	回答 (当てはまる箇所に○)			
		非常に当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらず	ほとんど当てはまらず
CI 役との共有体験	①非言語イメージが共有できた		○		
	②言語レベルでの共有ができた	○			
	③面識のある者同士である影響が感じられた		○		
	④対象者の健康度の高さを感じた	○			
	⑤病態水準の重い CI には難しいと感じた			○	
Th 役としての内的体験	⑥面接者の雰囲気や環境への配慮を感じた		○		
	⑦面接者が制作者に与える影響を感じた	○			
	⑧二人で共同作業をしている印象を受けた	○			
	⑨ Th 側のコミットメントが必要とわかった	○			
	⑩作品以外の情報が必要だとわかった	○			
	⑪解釈することの不安・難しさを感じた			○	
	⑫自分なりに解釈できた実感を得た		○		
	⑬解釈は慎重に扱うべきだと感じた	○			
	⑭実際の面接に向けての参考になった	○			
Th 役としての自覚	⑮ Th の姿勢・心がけに気づけた	○			
	⑯作り手 (CI 役) の気持ちを理解できた	○			
	⑰ Th という立場の不安や難しさを実感した	○			
	⑱ Th の役割に徹しきれない気がした	○			

iv. 対象者 C の CI 体験

【第 1 課題】①サイフ, ②家, ③家の中, ④持ち物, ⑤お茶, ⑥東京の銀座, ⑦音楽ホール, ⑧違う土地の風景, ⑨ネコの計 9 枚の写真が貼られた。「特にやりにくくはなかった。自由制作のコラージュと特に変わらない」(感想)。「左側は自分の生活圏のイメージ」(連想)で、「右側は今なかなか出かけられない遠くにあるもののイメージ」(連想)で選んだ。「真ん中に貼られたネコは自己像に近い存在」(連想)ことが語られた。

【第 2 課題】①山を見ている男, ②阿波踊り, ③ボートに乗っている人たち, ④水泳選手たち, ⑤母親と赤ん坊の計 5 枚の写真が貼られた。制作中「(写っている人が何を言っているか, 考えているか) いくらでも出てきます」(制作時)と自発的に語る。選んだ写真は『生きることのダイナミックさ』が共通している」(連想)。「研究会でコラージュを作る時は, 人物を貼ると自分を出し過ぎる危険を感じ, 物の写真しか貼らない」(連想)と語られた。

【第 3 課題】①時計, ②富士山, ③波, ④仏像の計 4 枚の写真が貼られた。「正直やりにくかった。観念としての『良いものと悪いもの』を考えるようになって, 単純に物質的な善し悪しでは選べない感じ」(連想)と語られた。

【第 4 課題】親子 (高齢の女性とその娘) の写真が選ばれた (図 4-2)。「母は健康に問題を抱え, 娘も辛い。でも変わらずに接し, 最後には「お母さんの子どもでもよかった」「この子の親でもよかった」と思える瞬間がくればと願う」と連想する。「現実に近い」(連想)ので, もう 1 枚の候補を選ぶか「特に葛藤を強く感じた」(インタビュー)。Th 役は傾聴に徹し, 写真と CI の連想に positive な印象も感じ, CI 役の持つ芯の強さを信じるのが大切と感じた。

【CI 体験全体を通して】「自分がどんな写真を選ぶのか, 教示で影響されず一貫していると感じた。Th 役に支えられているという感じだったので, Th の能動性や一緒に共同作業している感じはあまりなかった」(インタビュー)。

v. 対象者 C の Th 体験

【第 1 課題】①ルミナリエ, ②氷, ③道, ④防寒着, ⑤花火, ⑥ GT カーの計 6 枚の写真が貼られた。Th 役の着眼点は「興行き感のある写真に作り手の気持ちが一番入っているのか?」「(箱庭で質問するように) どこに自分を置くのか?」であった。CI 役は『作品の中のどこに自分がいるのか』を特に意識しておらず, 腑に落ちなかった。

【第 2 課題】①宇宙飛行士, ②卒業式, ③勉強会をする生徒たち, ④オープンカーを運転する男性, ⑤笑顔の男性, ⑥出張中のサラリーマンの計 6 枚の写真が貼られた。Th 役の着眼点は『空白になる, 何も考えていない』

という連想の写真(①と⑥)を2枚も選んだ理由は何?」であった。なおCI役としては、印象的で気になる写真を選び、連想は後で浮かんできたので、「空白になる、何も考えていない」ことを表現したい訳ではなかった。

【第3課題】①仏像、②ロボットと子どもたち、③点滴を受ける外国の子どもとその母親の計3枚の写真が貼られた。Th役の着眼点は「社会的なものの影響がある?②と③は社会的な捉え方をしている?」であり、Th役には「自分とは違う」と感じられた様子である。CI役も、社会的な関心が写真選びに反映していると気づかされた。

【第4課題】テントの中で眠るアスリートの写真が選ばれ、「つかの間の休息。目を覚ませばまた過酷なレースが何日も続くが、無事乗り切ってゴールする」と連想された。Th役の着眼点は「自分は今の心理状態にマッチする写真を選び、皆そうすると思ったが、CI役は安全なところで選んでいる?と思った。本当に選びたかったものは何だろう?」だった。CI役は、過酷な状況に踏み込む自信や意欲はなく、無理せず心身の健康を整えたいという思いが強い。確かに『自分の今の心理状態にマッチしない』写真を選んでおり、Th役の引っかかりは当然である。

【Th体験全体を通して】「CI役が説明してくれた部分はわかったが、自分が作品から漠然と感じていることがあっても、それをどうやって尋ねていいかわからず思いつけず、聞くことができなかった。CI役と共同作業をしている印象はやや弱かった。表面的ではないレベルの解釈ができたという実感はなかなか持てなかった」(インタビュー)。

vi. 対象者CのCI体験・Th体験の特徴

CのCI体験は、「Th役の提供した枠の中で表現が促され、葛藤しながらも支えられた」点が中核と思われる。チェックリスト(表3-3)では、<表現の促進>の項目①「意外な表現が出てきた」②「自分らしさが出ていた」③「状況が反映されていた」、<感情体験>の項目⑨「ポジネガの感情間で葛藤した」、そして<Th役の存在意義>の項目⑭「見守られている感覚があった」が「非常に当てはまる」にチェックされ上記の体験を反映している。またTh体験では、自分なりの知識や経験を使いCI役の表現を理解しようとしたが、むしろC自身と感覚や関心が違うと感じ、チェックリスト(表3-4)の①「非言語イメージが共有された」、②「言語レベルでの共有ができた」、⑫「自分なりに解釈できた実感を得た」の3項目で「あまり当てはまらず」にチェックされたのだろう。

表3-3 対象者Cのコラージュ療法体験・セルフチェックリスト(CI体験)

	チェック項目	回答(当てはまる箇所に○)			
		非常に当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらず	ほとんど当てはまらず
C 役 の 内 的 体 験	①意外な表現が出てきた	○			
	②自分らしさが出ていた	○			
	③状況が反映されていた	○			
	④表現への抵抗を感じた			○	
	⑤教示が表現に影響した			○	
	⑥言語化が促進された		○		
感情 体 験	⑦ポジティブな感情が起こった		○		
	⑧ネガティブな感情が起こった		○		
	⑨ポジネガの感情間で葛藤した	○			
	⑩感情の変化が生じた		○		
内 的 作 業	⑪自己への気づきがあった		○		
	⑫自己への内省が生じた		○		
	⑬自他の違いに気づいた			○	
Th 役 の 存 在 意 義	⑭見守られている感覚があった	○			
	⑮ラポールが得られていた	○			
	⑯能動的な働きかけを感じた			○	
	⑰共同作業をしている感覚がした			○	
	⑱コラージュの扱い方の理解を理解した		○		
面 接 場 面 で の 活 用	⑲セラピストの姿勢が理解できた	○			

表3-4 対象者Cのコラージュ療法体験・セルフチェックリスト(Th体験)

	チェック項目	回答(当てはまる箇所に○)			
		非常に当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらず	ほとんど当てはまらず
C 役 と の 共 有 体 験	①非言語イメージが共有できた			○	
	②言語レベルでの共有ができた			○	
	③面識のある者同士である影響が感じられた		○		
	④対象者の健康度の高さを感じた		○		
	⑤病態水準の重いCIには難しいと感じた	○			
Th 役 と し て の 機 能 解 釈 に つ い て の 内 的 体 験	⑥面接者の雰囲気や環境への配慮を感じた	○			
	⑦面接者が制作者に与える影響を感じた	○			
	⑧二人で共同作業をしている印象を受けた		○		
	⑨Th側のコミットメントが必要とわかった	○			
	⑩作品以外の情報が必要だとわかった		○		
	⑪解釈することの不安・難しさを感じた	○			
	⑫自分なりに解釈できた実感を得た			○	
	⑬解釈は慎重に扱うべきだと感じた		○		
Th と し て の 自 覚	⑭実際の面接に向けての参考になった	○			
	⑮Thの姿勢・心がけに気づけた		○		
	⑯作り手(CI役)の気持ちを理解できた		○		
	⑰Thという立場の不安や難しさを実感した	○			
	⑱Thの役割に徹しきれない気がした	○			

vii. 対象者DのCI体験

【第1課題】①空、②飛行機、③鳥、④鹿、⑤クラシックカー、⑦ビール、⑥おうちのイメージ(家の中)、⑧? (風水盤)⑨りんごの計9枚の写真が貼られた(図4-3)。⑧は「何なのかわからないけど、惹かれるも

のを感じたので」(連想), ⑨は「せっかくなら, 一番目立つ金色に輝いているのを」(連想) 使おうと思った。「久しぶりにコラージュを作って楽しい」(連想) という言葉通り, とても楽しそうな様子が伝わる。また「お互い知り合いなので, 抵抗は特に感じなかった」(インタビュー)。

【第2課題】①お遍路さん, ②夏目漱石, ③男性と女性, ④積み木をしている男の子, ⑤外国の子ども, ⑥サーファーたちの計6枚の写真が貼られた。「せっかくなら制限枚数一杯を貼りたかった。⑥の写真なら台紙の空白に貼れそうだった」(連想) と語る。「制限枚数やテーマの指定があると写真のチョイスが難しい。自由制作の方が自分には合っていると思う」(連想) とも話す。

【第3課題】①フルーツと野菜, ②橋, ③消防士さん達, ④女の子, ⑤銃を向けている人の計5枚の写真が貼られた。写真を選びながら「難しい」と呟く(制作時)。「課題が決まっている、『良い』『悪い』に合う写真を見つけにくい。決めつけるような見方をしないから?」(連想) と語る。「自由制作なら余白がないように貼るが, 枚数が決まっていますどうしてもすき間が空く。本当はもっと貼りたい」(連想) と過去の制作体験との違いに言及する。

【第4課題】スノーボードの選手の写真が選ばれ, 「これはオリンピック。優勝が準優勝かがこれで決まる, という状況。優勝して, 金メダリストになって, その後の人生が変わる。一生懸命に練習して, 苦勞してきたことが報われたのだと思う」と連想された。「『そうであって欲しいな』という願望というか, 『素直に応援してあげたいな』という感じ。何というか, 自分らしいというか『わかりやすいな〜』」(連想) と語る。この課題もどうしても空白が目立つのだが, 「以前より, 空白が残るのが許せるようになったかな? という感じ(笑)」と話す。



図4-3 対象者DのCI体験・第1課題

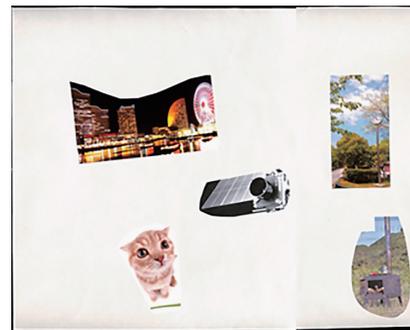


図4-4 対象者EのCI体験・第1課題

【CI体験全体を通して】「全くという訳ではないが, ネガティブな面で負担を感じなかった。特に印象的なのは, 言葉にならなかった印象が, 作品をつくることで言語化へと促されたこと。写真を何気なく選んだが, 後で選んだ意味がわかってくる体験もした。Th 役から枚数の制限を伝えられたり, 出来上がった後での対話があるところから, セラピーとしてのコラージュと, 自由制作のコラージュの違いを感じた」(インタビュー)

viii. 対象者DのTh体験

【第1課題】①眼鏡, ②カメラ, ③ iPod, ④腕時計, ⑤シャツ, ⑥ボウリングのピン, ⑦ iPad, ⑧十徳ナイフ, ⑨スポーツ飲料, ⑩電気カミソリの計10枚の写真が貼られた。Th 役の着眼点は「最初にした写真について質問しよう」「写真の形に添って切り抜いたことを質問しよう」だった。CI 役の行動から気持ちを理解しようとしていた。

【第2課題】①生徒と先生, ②正装した男性, ③マラソンランナーたち, ④歌うおじさんたち, ⑤携帯で撮影する女性, ⑥スイカを食べる男性の計6枚の写真が貼られた。Th 役の着眼点は「写真の貼り方」「第1課題と違って写真を加工しなかったこと」「(中央の写真2枚の) 配置を変えた理由」だった。第2課題で写真の加工する割合が低下するとの報告があるが(今田, 2019), この場合は「写真の加工よりも, 教示に従い写真の人物の発言や気持ちを想像するのに関心が写った」と, 「配置を変えた理由は『何となく』としか言えない」のが率直なところだった。

【第3課題】①シャンパンタワー, ②雪の中を走る車, ③映画制作, ④ハンバーグ, ⑤赤ちゃん, ⑥子どもの絵の計6枚の写真が貼られた。Th 役の着眼点は写真④に対する「『大きな写真のインパクト』で, 自分では「良いもの」だろうと思って聞いてみたら, そうではなかったのが意外に感じた」であった。このことが「対話することで確かめていく, ということも体験を通してわかった気がした」(インタビュー) という感想につながったよ

うである。

【第4課題】ジャンプする生徒たちの写真が選ばれ、「動画を撮影している。この子たちが成長してそれぞれの道に進んでも、この時一緒に撮影したことを折に触れて思い出さだろう」と連想された。Th 役の着眼点は「微妙に角度をつけて貼ったので、貼り方を考えたのかな？」であった。確かに CI 役としてはじっくりくる感じに貼りたいとは思ったが、それよりも写真から自分自身の体験との関連を想起したことの方が心の中で比重が大きかった。

【Th 体験全体を通して】「コラージュ療法で Th が何をすればいいのかわかった気がした。解釈は難しいが自分なりに CI 役の様子を見て、『こういうことなのかな?』と感じられた。Th 役が難しかったのは、教示を本来指定されている通りきっちりと伝えないといけないのと、作品について質問の仕方に気をつけることだった」(インタビュー)。

ix. 対象者 D の CI 体験・Th 体験の特徴

D の CI 体験では、「何より自分らしく表現することを楽しみながら、自分の表現の意味に気づくことが出来た」のが大きかったようだ。チェックリスト(表3-5)では、質問②「自分らしさが出ていた」、⑪「自己への気づきがあった」といった項目が「非常に当てはまる」にチェックされていたことは頷ける。また質問⑤「教示が表現に影響した」、⑨「ポジネガの感情間で葛藤した」については「ほとんど当てはまらず」にチェックされていたことも、D の特徴をよく表していた。また Th 体験では、自分なりの着眼点を手がかりにコラージュ療法の Th としての機能を果たそうとする姿勢が感じられた。着眼点の全てが正鵠を得ているという訳にはいかなくとも、自分の印象と CI 役の連想が異なるのに驚きつつ、「対話を通して確かめていく」経験につながったようである。チェックリスト(表3-6)では、C にとって盲点であった質問⑤「病態水準の重い CI には難しいと思った」以外は全て「非常に当てはまる」「やや当てはまる」にチェックされ、D の持つ物事をポジティブに受け止める姿勢を感じた。

表3-5 対象者 D のコラージュ療法体験・セルフチェックリスト (CI 体験)

	チェック項目	回答 (当てはまる箇所に○)			
		非常に当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらず	ほとんど当てはまらず
CI 役の内面的体験	①意外な表現が出てきた		○		
	②自分らしさが出ていた	○			
	③状況が反映されていた	○			
	④表現への抵抗を感じた			○	
	⑤教示が表現に影響した				○
	⑥言語化が促進された		○		
	⑦ポジティブな感情が起こった	○			
	⑧ネガティブな感情が起こった			○	
	⑨ポジネガの感情間で葛藤した				○
	⑩感情の変化が生じた		○		
Th 役の内面的体験	⑪自己への気づきがあった	○			
	⑫自己への内省が生じた		○		
	⑬自他の違いに気づいた	○			
Th 役の存在意義	⑭見守られている感覚があった	○			
	⑮ラポールが得られていた	○			
	⑯能動的な働きかけを感じた		○		
面接場面で活用の活用	⑰共同作業をしている感覚がした		○		
	⑱コラージュの扱い方の理解を理解した	○			
	⑲セラピストの姿勢が理解できた	○			

表3-6 対象者 D のコラージュ療法体験・セルフチェックリスト (Th 体験)

	チェック項目	回答 (当てはまる箇所に○)			
		非常に当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらず	ほとんど当てはまらず
CI 役との共有体験	①非言語イメージが共有できた		○		
	②言語レベルでの共有ができた		○		
	③面識のある者同士である影響が感じられた	○			
	④対象者の健康度の高さを感じた		○		
	⑤病態水準の重い CI には難しいと感じた			○	
Th 役としての機能	⑥面接者の雰囲気や環境への配慮を感じた		○		
	⑦面接者が制作者に与える影響を感じた	○			
	⑧二人で共同作業をしている印象を受けた	○			
	⑨ Th 側のコミットメントが必要とわかった	○			
	⑩作品以外の情報が必要だとわかった		○		
	⑪解釈することの不安・難しさを感じた	○			
	⑫自分なりに解釈できた実感を得た		○		
	⑬解釈は慎重に扱うべきだと感じた	○			
Th 役としての自覚	⑭実際の面接に向けての参考になった	○			
	⑮ Th の姿勢・心がけに気づけた	○			
	⑯作り手 (CI 役) の気持ちを理解できた	○			
	⑰ Th という立場の不安や難しさを実感した	○			
	⑱ Th の役割に徹しきれない気がした		○		

x. 対象者 E の CI 体験

【第1課題】①夜景、②カメラ、③キャンプ用具、④時計、⑤ネコの計5枚の写真が貼られた(図4-4)。「初めての状況に緊張して」(インタビュー)、「これって切っても?」(制作時)と写真の加工の可否を尋ねたり、5枚貼ってしばらく考え「これ、どうなったら終わりという?」(制作時)と確認したり、「『どこまで出しているのか?』という感じで表現を抑えめにした」(インタビュー)。連想も短く簡単に語っていたが、「『楽しいイメージの裏には困ったこともあった』という①を見て、自分の経験を思い出した」(インタビュー)とも語られ、少しずつ心の動きが生じていた。

【第2課題】①引っ越してきて、部屋のレイアウトを考えているところ、②お絵かきをしている女の子、③結婚式、④女の人、⑤バイクに乗っている人の計5枚の写真が貼られた。「結構苦労した。連想が浮かばない写真が多かった」(連想)と言いつつ、「慣れてきて、じわじわと自分らしさを出してきている」(インタビュー)「連想を話すのは、スムーズとはいかないけれど、Th役に引き出され、連想が出てきたなと感じた」(インタビュー)様子だった。自己への気づきは「1枚目ではまあまあだった。2枚目以降、いろいろ考えていた」(インタビュー)と語られた。

【第3課題】①メガネ、②子どもたち、③靴、④山の広場の計4枚の写真が貼られた。制作時、④が二つ折りになっており、貼ろうとして折り込まれた部分があるのに気づき戸惑ったが、最後は隅にだけ糊を付けて貼り、折り込まれた部分を引き出せるようにした。特に「①『メガネ』で『良い』ではなく、『悪い』方が先に出たのが自分らしい、と後で振り返って感じた」(インタビュー)と語られた。

【第4課題】親子(男の子とお父さん)の写真が選ばれ、「親子で楽しく話している。息子は今、高校生くらい。変化するとすると、二十歳くらいになって、それまで一緒に住んでいたのが、独り暮らしをするようになる。でもそれは夢があって、がんばっていくようになる変化。子どもが成長して夢ができた。自然な変化。ポジティブな方に変化」と連想する。「そんなに探さずに、使おうと思う写真が見つかった」と語られた(連想)。

【体験全体を通して】「写真を撮るのが好きというのもあり、好きな写真を選ぶのが楽しかった。でも自由に選べる方が楽しかった。どこまで自分を表現していいのか、ということはずっとあった。Th役とのラポールはしっかり感じたが、能動的な働きかけはあまり感じなかった。むしろ見守られイメージを共有している感じが強かった。一通り経験し実際のコラージュの扱い方が何となくわかった。用意するものなども知れてよかった」(インタビュー)。

xi. 対象者EのTh体験

【第1課題】①観光列車、②空、③ビール、④山、⑤キャンプ、⑥キャスター付のバッグ、⑦洗濯機、⑧ピクルス、⑨コーヒー、⑩室内犬の計10枚の写真が貼られた。まずTh役は「『どこまで貼りたいのかな?』と思った(笑)想像が膨らんでいっている感じ」(インタビュー)という率直な印象を受けつつも、「(写真が)多いけど、まとまりは悪くない」ことや、「『旅行(脳内)』と『家(家庭的)』のバランスについて」「家庭での過ごし方も充実しているのかな?と思ったので、それを尋ねてもよかったかもしれない」といった着眼点を得ている。

【第2課題】①パン屋さん、②勉強する生徒、③宇宙飛行士、④外国の少女たち、⑤チョコを食べる女の子、⑥レスキュー隊員たちの計6枚の写真が貼られた。Th役の着眼点は「②を貼ったのは作り手の普段の仕事上の経験からかな?と思った」と「③だけが他の人物と異質で、『どうしてこの写真を選んだんだろう?』と不思議に思った」だった。CI役は、②への指摘は意外だったが、次第に「そうかもしれない」と感じられた。③については、対象者B、CとのTh体験でも同様の写真が選んでおり、CI役として自己の関心に基づいた一貫性のある選択なのだが、Eはそのことは知らないため不思議に思ったのは当然である。

【第3課題】①赤ちゃんとお母さん、②ピアノを弾く人、③ファッションナブルな高齢の女性、④塩釜焼き、⑤金と銀のインゴット、⑥スマホの計6枚の写真が貼られた。Th役の着眼点は「④の写真を見て、『これは何?』と思った」「②の写真も連想の内容は一般的というよりパーソナルな感じが強かった」と「偶然かもしれないが、作品の下の段にはパーソナルな価値観の出た写真が並んでいるのだなと思った」であった。CI役としては、④の写真もパーソナルな体験と結びついており、Th役の着眼点は的を射ていると感じた。

【第4課題】孫を抱っこするおばあちゃんの写真が選ばれ、「たまに帰省する孫をかわいがっている。年月が経ちおばあちゃんが亡くなっても、子ども時代の思い出として、孫の心の中でおばあちゃんは生き続ける」と連想された。Th役の着眼点は「こちらが聞こうと思っていたことを、CIの方からどんどん話してくれたこと」であった。CI役がこの写真を通してパーソナルな体験が想起され、熱心に話していたのは確かである。

【Th体験全体を通して】「病態の重い人がこの方法で制作するとイメージが広がり過ぎて混沌としてしまうかなと感じた。Thからの働きかけ、質問、イメージや話題を広げていくことは試したが、難しかった。CIによっては、Thの中でイメージをふくらませる方がいいのではと思った。解釈をそのまま聞く、言葉にするのではなく、慎重に扱わなくてはと改めて感じた。非言語イメージが共有できた、何となく解釈できた?と思える経験をした。Thの立場でコラージュを作ってもらうのは初めてで、抑え気味に関わったかもしれない。コミットメント?ThからCIのイメージに近づいていく感じ?が必要。もう少しThが思ったことを出してよかった?と後で考えた」(インタビュー)。

xii. 対象者 E の CI 体験・Th 体験の特徴

E の CI 体験は、「緊張や戸惑いはあるが Th 役とラポールが成立し、次第に自分らしい表現が出てきたと感じ、Th 役から引き出されて連想が進み、気づきを得た」といったものだと思われる。チェックリスト（表 3-7）では、②「自分らしさが出ていた」、⑪「自己への気づきがあった」、⑮「ラポールが得られていた」、が「非常に当てはまる」にチェックされ、上記の体験をよく反映している。また E の Th 体験に関しては、E 成りの感性での着眼点がかかり射ていると CI 役は感じたが、チェックリスト（表 3-8）で《Th としての自覚》に関する質問⑭「実際の面接の参考になった」、⑮「Th の姿勢・心がけに気づけた」で「非常に当てはまる」にチェックしているように、E 自身はむしろ臨床場面でコラージュを使いこなすための Th の姿勢やノウハウを吸収することに心が向いていた。

表 3-7 対象者 E のコラージュ療法体験・セルフチェックリスト (CI 体験)

	チェック項目	回答 (当てはまる箇所を○)			
		非常に当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらず	ほとんど当てはまらず
CI 役の内面的体験	①意外な表現が出てきた			○	
	②自分らしさが出ていた	○			
	③状況が反映されていた		○		
	④表現への抵抗を感じた			○	
	⑤教示が表現に影響した			○	
	⑥言語化が促進された		○		
	⑦ポジティブな感情が起こった	○			
	⑧ネガティブな感情が起こった		○		
	⑨ポジティブな感情間で葛藤した		○		
	⑩感情の変化が生じた			○	
	⑪自己への気づきがあった	○			
	⑫自己への内省が生じた			○	
	⑬自他の違いに気づいた		○		
Th 役の存在意義	⑭見守られている感覚があった		○		
	⑮ラポールが得られていた	○			
	⑯能動的な働きかけを感じた			○	
面接場面の活用	⑰コラージュの扱い方の理解を理解した		○		
	⑱セラピストの姿勢が理解できた		○		

表 3-8 対象者 E のコラージュ療法体験・セルフチェックリスト (Th 体験)

	チェック項目	回答 (当てはまる箇所を○)			
		非常に当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらず	ほとんど当てはまらず
CI 役との共有体験	①非言語イメージが共有できた		○		
	②言語レベルでの共有ができた			○	
	③面識のある者同士である影響が感じられた				○
	④対象者の健康度の高さを感じた		○		
	⑤病態水準の重い CI には難しいと感じた		○		
Th 役としての内的体験	⑥面接者の雰囲気や環境への配慮を感じた		○		
	⑦面接者が制作者に与える影響を感じた	○			
	⑧二人で共同作業をしている印象を受けた		○		
	⑨ Th 側のコミットメントが必要とわかった		○		
	⑩作品以外の情報が必要だとわかった			○	
	⑪解釈することの不安・難しさを感じた				○
	⑫自分なりに解釈できた実感を得た		○		
	⑬解釈は慎重に扱うべきだと感じた	○			
	⑭実際の面接に向けての参考になった	○			
	⑮ Th の姿勢・心がけに気づけた	○			
Th としての自覚	⑯作り手 (CI 役) の気持ちを理解できた	○			
	⑰ Th という立場の不安や難しさを実感した		○		
	⑱ Th の役割に徹しきれない気がした			○	

(3) コラージュ療法体験・セルフチェックリストの効用について

1) M-GTA による概念とカテゴリーの生成

対象者 B, C, D, E の 4 名へのインタビューで得られた回答（1 人あたり 100~300 文字程度）を M-GTA（木下, 2003）によって分析した結果、コラージュ療法体験・セルフチェックリストの効用について、6 つの概念と 2 つのカテゴリーが得られた（表 5）。生成されたカテゴリーと概念をまとめたストーリーラインを以下に記述するとともに、プロセス図を図 5 として示した。

2) ストーリーライン

※以下、《 》はカテゴリー、〈 〉はサブカテゴリー、【 】は概念を示す。

対象者はコラージュ療法体験・セルフチェックリストに回答し、それを元に MPC の CI 体験・Th 体験を振り返ることで、Th がコラージュ療法を実施する際に身につけるべき様々な要素に対し【視野が拡大する】あるいは【「盲点」を埋める】ような体験を通して〈振り返り可能な要素が増える〉。また、知り得た様々な【要素間のつながりをイメージする】ことや、【感覚的な体験を意識化する】ような体験を通じ〈振り返りの質が向上する〉。これらの経験により《振り返りが促進される》。なお、体験者の実感として、コラージュ療法体験・セルフチェックリストに回答することに【デメリットはない】、【自然に振り返れる】など《使いやすい》手法である。

3) 各対象者ごとのコラージュ療法体験・セルフチェックリストの効用と改善点

B~E のインタビュー内容からコラージュ療法体験・セルフチェックリストがどのようにふりかえりを促進したか検討した。B が言及した概念は 4 つで、2 つのカテゴリーを網羅し、プロセス図に示された過程を満遍なく体験したようである。C は 2 つの概念に言及し、カテゴリー《振り返りが促進される》の 2 つのサブカテゴリーを網羅し、ある程度の質・量のふりかえりを得た。D の言及した概念は【「盲点を埋める】」のみに限定され、特

表4 M-GTAにて生成された「コラージュ療法体験・セルフチェックリストの効用」の概念およびカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	概念	定義	ヴァリエーション
振り返りが可能な要素が増える	視野が拡大する		自分で振り返り、気付ける要素の数には限界があるが、リストを参照することで視野が拡大する。	自由記述的に振り返るのでは、チェックリスト項目の半分くらいしか浮かんでこなかったように思う(B-1)
	「盲点」を埋める		単に視野を広げるといふより、自分にとって盲点であった要素の存在を自覚させるきっかけとなる。	ピンとくる項目と、読んで初めて自覚する項目とがあることに気づいた(C-2)、盲点を埋めるためにはよいと思う(D-3)
振り返りが促進される	要素間のつながりをイメージする		コラージュを行う際には、リストのそれぞれの要素が有機的につながっていることに気づかせる	チェックリストに示されている要素同士のつながりがイメージしやすくなったと思う。自分が体験したこと、感じたことがセラピーとしてどう位置づけられるのかを理解しやすくなったと思う(B-3)
振り返りの質が向上する	感覚的な体験を意識化する	体験を通して感覚的に捉えた要素を意識化させる		コラージュ体験を通して「大事な」と感覚的に捉えたことをチェックすることによって、考え、意識化するという作業が必要だと思った(C-1)
使いやすい	デメリットはない		リストを使用してデメリットは感じなかった	チェックリストを使うデメリットは特にない。項目数も多過ぎると思わない(B-4)
	自然に振り返れる		リストを使用して自然に振り返ることができた	実際に項目ごとに自然に振り返ることができた(E-3)

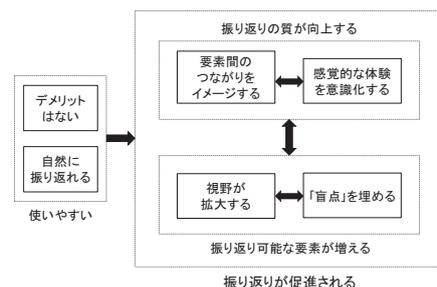


図5 コラージュ療法体験・セルフチェックリストの効用

に印象的な体験だったのだろう。Eは2つの概念に言及し、2つのカテゴリーを網羅していたが、特に【感覚的な体験を意識化する】体験が印象的だったようである。なお、今回使用したチェックリストは表3-1~3-8のようにカテゴリー、サブカテゴリーまで提示され、このリストで「何に注目しているのか」が見えすぎており、臨床家である対象者の回答に影響を与えたかもしれない。今後は、評定の段階で質問項目のみをランダムに配置して回答し、ふりかえりの段階でカテゴリー、サブカテゴリーごとに配置した結果を示すよう修正したい。

(4) 本研究における課題と今後の展望

1) 面識がある者同士で研究を実施したことによる影響

本研究の対象者は筆者の居住地における若手の心理援助者のコミュニティに属しており、筆者と何らかの形で業務上の関わりのあった者や、面識はあるものの数年来合う機会がなかった者まで多様であった。また、筆者はこの地方でコラージュ療法研究会を主催しており、対象者にはその研究会に参加した経験を持つ者もいた。また、当然ながら臨床経験も筆者の方が長い。本研究を実施するに当たり、本学に設置されている倫理審査委員会の承認を得て、対象者への心理的負担や侵襲性などについては適切な配慮を行うよう腐心したが、それでも対象者にとって筆者は「大学教授で、コラージュ療法の専門家であり、また自分よりも経験豊富な臨床家である」という事実そのものによって、意識的・無意識的に権威を感じさせられ、自分が評価される不安、経験のない技法の扱いに対する自身のなさなどを助長させたことを完全には否定できない。こうした観点で各対象者のCI体験を検証すると、第1課題においてBは「最初緊張していた」、Eも「初めての場面で緊張して」と語っており、当然ながら緊張が生じやすくなる。またAは写真を貼る枚数が極端に少なく、「あまり自分を出さず周回のなとところでやろうかな、と思っていた」と語り、Eも「『どこまで出しているのか?』という感じで表現を控えめにしようと思う」と述べ、明らかに防衛が働いている。ただし、課題が進むにつれ当初の緊張や防衛は軽減し、むしろ課題に沿って表現することで自己の内面に目を向けるプロセスが進んでいくのも確かで、いかに体験開始時の不安から生じる防衛や抵抗をTh役とCI役が協力して乗り越えるのが鍵になると思われる。またTh体験ではCが「表面的ではないレベルの解釈がやれたという実感はなかなか持てなかった」と語り、B、Dでは教示が不正確になったことには、CI役である筆者との非対称な関係が遠因として作用したことも想定すべきかもしれない。

2) 研修実施者がCI役としてコラージュを作成する際の注意点

今回実施した研修では、研修を提供する立場の者がCI役としてコラージュを制作することになる。その際どんな作品を制作するのか、研修を受ける側への影響を考慮する必要がある。筆者が実際に注意したのは以下の3点である。①基本的に今の自分にとってしっくりくるような作品を作る。Th役に配慮することは、無難でおぼろげな作品を作ることではない。②自分の作品の傾向を事前によく理解しておく。例えば、筆者の場合、形式分析的にはなるべく枚数を多く、大きめの写真を使いたがる、内容分析的には仏像や宇宙飛行士などをよく使う、第3課題では「良いと悪いの両方」と連想することが多い、第4課題では将来の展望というより過去の体験にま

つわる連想から写真を選ぶことが多いなどの傾向がある。③自分にとって未消化な心理的課題など、模擬面接の場にふさわしくない表現が漏出することがないように気をつける。筆者は面接内で Th が行った描画の一部で、本来 Cl-Th 関係の中で共有されるべきものとは違う、Th 自身の個人的な無意識過程が時に表出してしまうことに気づかされた(今田, 2006)。コラージュや描画の制作において、このような現象を完全に食い止めることは困難だが、このようなことが常に起こり得るのを自覚し、自分の作品を振り返り吟味することが大切になる。

4. おわりに

Cl 体験における心理プロセスは対象者ごとに比較的多様性が認められたが、Th 体験ではコラージュ療法の理論・知識が十分でないため作品や連想を通して Cl 役とイメージをうまく共有し辛いこと、解釈が Cl 役にとってもしっかりくるか自信が持ちにくいこと、そうした難しさが面接中の Th 役の姿勢に影響を与えることなどが対象者に共通していた。このように自らの臨床経験を単に援用するだけで Th としてコラージュ療法を実施するのは容易ではない。今回の知見から、コラージュ作品と連想を通して Cl と Th がイメージを共有し、そこから妥当な解釈を行うワークを取り入れた研修法を工夫し、心理療法としてのコラージュの本質を体験的に理解する必要がある。その際コラージュ療法体験・セルフチェックリストを用いることで体験的理解を促すことが有用と思われる。

今回の研修についての感想を自由に話してもらったところ、「1対1での研修は贅沢だなと感じた。現場でこういうことをやってもらえたら大変ありがたい」(体験者 C)、「コラージュはセラピーの手立ての一つとして役立つと思った。特に子どもや、言語化が苦手な人には使ってみる価値がある。スクールカウンセラー先で『この子には向いているのでは?』という生徒はしばしばいるが、実際にコラージュを使うノウハウがないので作ってもらったことはない。若手のスクールカウンセラーにコラージュ療法研修のニーズはあると思う」(対象者 D)、「Cl 役をやれたのがよかった。心理職をやってきて一生懸命だったが、振り返ることはあまり出来なかった。今日それが出来た。落ちついて振り返ること、一度立ち止まって自分を見直すことが出来てよかったです」(対象者 E)、といった生の声を聞くことが出来た。本研究はコラージュ療法の研修法について検討することが目的だったが、心理援助職の初心者を対象とした研修においては単に面接技法のノウハウを伝授するに留まらず、自らの経験を振り返って誰かと共有し、内省を伴う心理プロセスを体験する機会を提供することの必要性を実感させられた。最後に、本研究への協力と作品や連想、インタビュー等により貴重なデータを提供して頂いた対象者の皆さんに改めて感謝いたします。

本研究は平成30年～令和3年度科学研究費補助金(基盤研究 C: 課題番号課題番号 18 K 03096)の助成を受けて実施した。

引用文献

- 今田雄三 MSSM にみるこころの変容—自己臭恐怖の思春期事例から— 箱庭療法学研究 18(2) 2006 19-33.
- 今田雄三 臨床心理士養成課程におけるコラージュ療法体験授業の展開: 施行法・技法の選択・検討法などの工夫を中心に 鳴門教育大学研究紀要 25 2010 218-231.
- 今田雄三 マガジン・フォト・コラージュ(MPC)に関する基礎的研究—解釈の指標となる基礎的データの検討— コラージュ療法学研究 10(1) 2019 3-15.
- 今田雄三 マガジン・フォト・コラージュ(MPC)を用いた大学院生へのグループスーパービジョンの効果について—「クライアント体験」「セラピスト体験」に関する M-GTA を用いた検討— コラージュ療法学研究 11(1) 2020 15-27.
- Landgarten, H. B.: Magazine Photo Collage: A multicultural assessment and treatment technique, Brunner Routledge, Inc. 1993. (近喰ふじ子・森谷寛之・杉浦京子・入江茂・服部令子訳 マガジン・フォト・コラージュ—心理査定と治療技法 誠信書房 2003)
- 森谷寛之 コラージュ療法実践の手引き その起源からアセスメントまで 金剛出版 2012
- 木下康仁 グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い 弘文堂 2003

An attempt to use collage therapy experience and self-checklist in training using Magazine Photo Collage (MPC) for novice therapists

IMADA Yuzo

The subjects of this study were five psychological support experts with less than five years of clinical experience. After setting out frameworks of simulated individual psychological interview, the author provided collage image creation experience by therapist (the author or subject) and client (subject). In the next stage, the subjects were asked to complete “self-assessment checklist for collage therapy experience” and share the findings in the interview. The author qualitatively investigated the subjects’ psychological processes and awareness-raising effect through the training experience. Consequently, the experience variously evoked their feelings and made them aware the position as a therapist. Implementing the self-assessment checklist also suggested that application of collage therapy to clients with severe psychopathology required special considerations and the subjects’ intuition might rise to the surface of their consciousness.